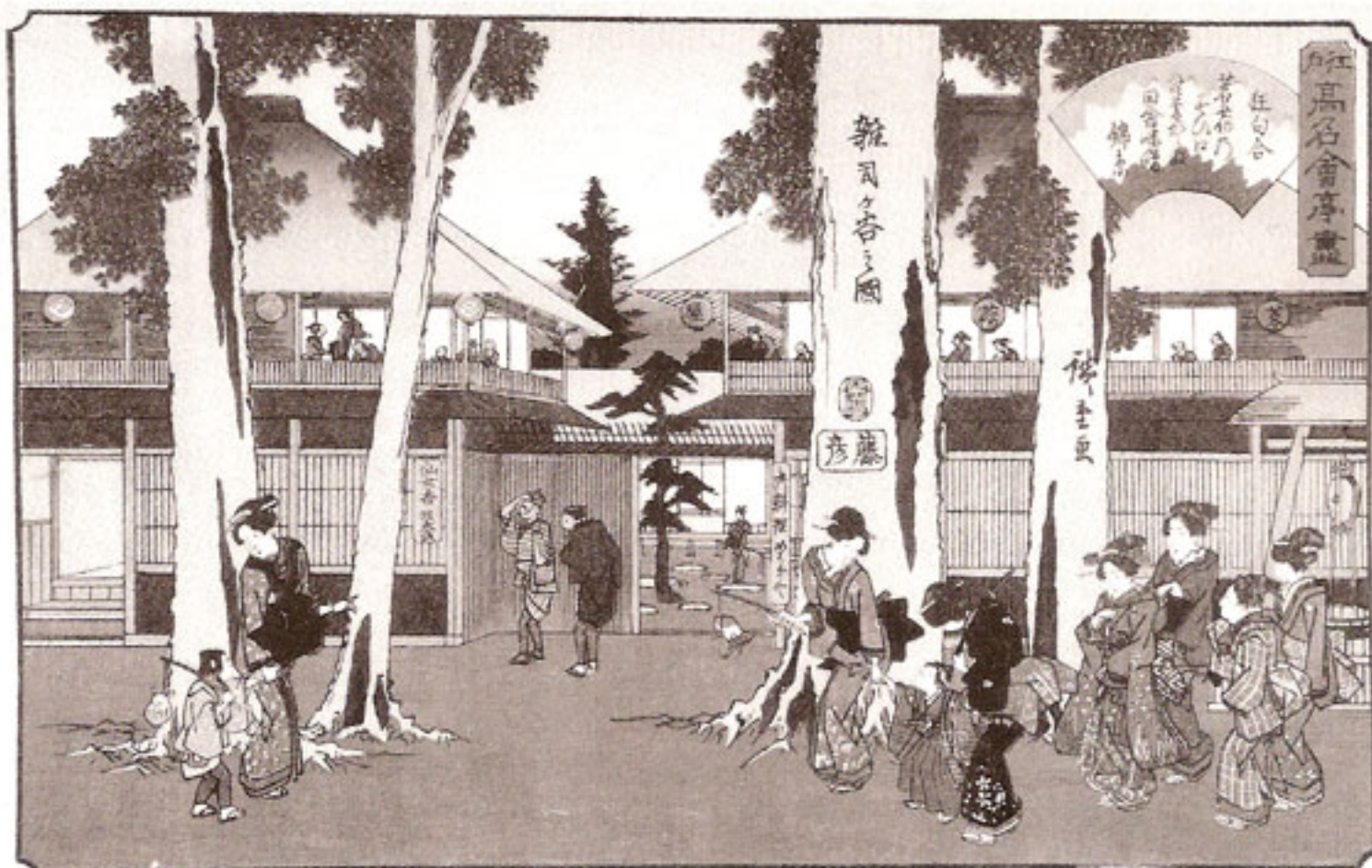


かたりべ 80

豊島区立郷土資料館だより

雑司が谷鬼子母神参道の料理屋



郷土資料館では、二〇〇六年一月二五日（水）から三月五日（日）までの会期で、企画展「ぞうしがや―雑司が谷鬼子母神とその周辺―」を開催いたします。

子授け・安産・子育ての信仰を集める雑司が谷鬼子母神は、江戸時代前半から多くの参詣客を集め、鬼子母神の参道沿いには土産物屋や料理屋といった商店が軒を連ね、門前町を形成していました。

上に掲げた錦絵は、歌川広重による天保期（一八三〇～四三）の作品「江戸高名会亭尽」（全三〇枚）のうちの一枚で、鬼子母神参道に面して営業していた茗荷屋を描いたものです。画面ほぼ中央に「御料理 めうがや」の看板がかかっているのが確認できます。また、二階の座敷からは参道の様子が眺められるようになっています。画面左端の子供の手には、参詣土産として販売されていたすすきみみずくが握られています。この「江戸高名会亭尽」は、江戸の有名料理屋三〇軒を取り上げたもので、ほかに山谷の八百善、池之端の蓬菜亭、王子の扇屋などが描かれています。料理屋の「宣伝」の側面が強く、写実的な風景画として鑑賞することはできませんが、当時の鬼子母神参道の雰囲気うかがい知ることができるでしょう。

さて、今回の企画展では、江戸時代の雑司が谷地域が持っていた三つの側面に光をあててみることにします。一つは、右に掲げた鬼子母神門前について、続いて、江戸幕府の政策動向に関わる御鷹部屋や、この地域への將軍の御成りについて、そして、農村としての雑司が谷村の生活についてです。一年でもっとも寒い時期の開催となりますが、皆さんお誘いあわせのうえご来館ください。（秋山）

■企画展「ぞうしがや―雑司が谷鬼子母神とその周辺―」

会期…一月二五日（水）～三月五日（日）ただし、毎週月曜日と二月一日（土）・一九日（日）は休館となります。

展示みどころ解説…二月四日（土）・一八日（土）午後二時より一時間程度（事前申し込み不要、直接展示室へお集まり下さい）。

戦争のなか 11歳の日記

豊島区の長崎第二国民学校（要町小学校をへて、現・要小学校）と都立第十高等女学校（戦後は豊島高校）を卒業された詩人・吉原幸子さん（二〇〇二年十一月御逝去）の山形市での集団学童疎開中の日記を、当館発行『豊島の集団学童疎開資料集（3）』に掲載させていただいています。この度、御子息の吉原純氏の「好意で疎開期以外の吉原さんの日記を閲覧させていただくことができました。戦争の広がりの中で小学校・高等女学校時代を過ごした記録が、個性豊かに書かれていて、たいへん興味深いものです。今回は、そのうち一九四二（昭和一七）年の記述から、いくつかをご紹介します。（あおき）

三年生の幸子さんは、一九四一年二月、マレー・ハワイ奇襲攻撃による対米英戦開始の数日後に、新宿区から豊島区要町に引越し、長崎第二国民学校に転校しました。

一九四二年は、開戦直後の勝利の興奮のなかで始まります。毎週のように家族の誰かと映画館に行っていたくらいの映画好きの幸子さんは、ハワイ海戦の映画をやっているところを探します。

（二月三日の日記）

新宿へ行き、ハワイ海戦の映画を見ようと思つてせっかく「文化ニュース」で三十米位の列につながり、きつぷを売る所へたどりついたら「十四歳未満

かとても地面がゆれて居た。学校の試験にも

（三月九日の日記）

今日は学校で修身の時に試験があった。

「大東亜戦争の始まった日はいつか」といふのや、「どこで戦つて居るか」といふのや、「日本は勝つて居るか負

けて居るか」といふのや、「私達はど

んな心がまへが大切か」といふのや、

合わせて五つ六つだった。

防空訓練があつたり、空襲警報が出た

りしますが、この時期は直接の戦場・戦

火からは遠いような生活ではありました。

ところが、四年生になつてすぐ

（四月一八日の日記）

家へ帰る途中、おそば屋のへんまで来

と

士

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と



当館特別展「子どもたちの出征―豊島の学童疎開」の記念講演会でお話しされる吉原幸子さん。（一九八八年八月）

ると「バン、パンーバン」と音がして次に「ブー」と言ふ音がきこえて来た。はつと思つて空を見ると飛行機が一台飛んで居て、むかふの方にはまっ白な煙がもくもくとして居る。

又「バン、パンーバン、バーンブー

ブー」と言ふ音が聞こえる。私はこはくなって家へむかつてか

け出した。通り道には人がいっぱい口

をあけて空を見て居る。そのうちにさ

いれんが「ポーポーポーポー

ポーポー」となり

出した。空襲だ。私はどんぐどんぐ

かけた。やっと家へついて見るとお父

さんが一人で庭のまん中に立ち、口を

あんぐりあけて上を見ていらした。

「お父さん、あのパンパンいふのなあ

に？」と聞くと高射砲だとわかった。

……暫くするとお姉さんが帰つて来た。

水を運んで防火用水桶を一ぱいにして

からもうこはい事も忘れてテニスコー

トで遊んだ。……「空襲中に何して遊

んでるんだい。」と笑はれた。

米軍の日本初空襲です（全国で死者四

五名）。翌日の日曜日は家族でハイキン

グに行く予定でしたが、「警戒警報中に

リュックサックをしよつて居る者なぞ居

ない」と中止になりました。（次号へ）

池袋の女 — 江戸時代の怪奇現象

みなさんは「池袋の女」というと、何を思い浮かべるでしょうか。これは江戸時代における「うわさ話」で、池袋村出身の若い女性を召使として雇い、さらに家の者がその女に手をつけると、さまざまな怪奇現象が起こる、という話です。

この話は江戸時代のいくつかの書物に書かれており、話の内容はそれぞれによつて若干異なりますが、ここでは、『遊歴雜記』という随筆に記されている話を紹介したいと思います。

「文政三年（一八二〇）三月のこと、江戸小石川上水端に住んでいた高須鍋五郎という武士の家で、池袋村の百姓家出身の二十二、三歳の下女を召抱えた。馴染むにしたがつて、鍋五郎はこの女に手をつけてしまう。ある黄昏時、台所の勝手口に背の高い頬かぶりした男が立っているといつてこの下女があわてて家の中へ駆け込んできた。鍋五郎が早速駆けつけたが、人影はない。屋敷じゅう探したが、そのような男はいなかった。どこかへ逃げたのだろう、用心しろと、行灯に火をともしたところ、屋根や雨戸に石が隙間

なく打ち込まれてきた。先ほどの男が石を投げてきているのだらうと外へ出て探すが、やはり人影は無い。両隣の家のもこの石の音のすごさに外へ出てくる。

投石はやまず、怪我の恐れもあるので人々は家の中へ入って協議した。その間にも投石は甚だしく、深夜に至っても盛んに打ち込まれるので、家の人は寝ることもできなかった。修験者三名を呼んで祈祷をしたが、戸棚にある食器類が突然飛び出したり、釜の下火のついた薪が飛び出て座敷の畳の上に散らばるなどということが起こり、修験者はあきらめて帰ってしまった。その後、飯を炊こうとしても火が飯の中へ入ったり、汁を煮ても大きな土のかたまりが落ちてきて釜がくだけて汁が飛び散ってしまうなどで食事でもできず、三日間隣家より食事を分けてもらう有様だった。そうしている間も昼夜投石はやまず、家内ではかまどの湯沸しが飛び出して中のお湯が飛び散ったり、火鉢が自然にひっくり返って座敷に火のついた灰が飛び散るなどして、片時も油断できない状態であった。そうしている



鳥山石燕『今昔百鬼拾遺』「天狗磔（てんぐつぶて）」
江戸時代・安永10（1781）年刊
（『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』角川文庫、より転載）

うちに、隣家の者がかの下女があやしいと言ひ、鍋五郎は下女に暇を出す。彼女が門の外へ出たとたんに怪事が止み、大風が吹いた後のようになつた。鍋五郎は彼女が祟っているとは思つてもいながつたが、後にして思えば、この怪事が起こっている間、家の者はみな恐怖のあまり寝つけなかつたのに、この下女のみはいつものように熟睡していたというのは不可解なことであつた。

他の文献では内容が諸所において異なりますが、すべてに共通することは、誰もいないのに石が投げられるという怪奇現象が起こることです。江戸時代の絵師、鳥山石燕によつて著された、様々

な化物や怪奇現象の図版集『今昔百鬼拾遺』には、「天狗磔」という現象が掲載されています（右図）。図では天狗が石を投げている様子が描かれ、「深山幽谷の中で一陣の魔風がおこり、山が鳴り、谷がこたえて大石を飛ばす事がある。これを天狗磔という」と説明されています。現代でこそ怪奇現象は科学による説明が試みられていますが、かつては原因を何かのしわざにせざるを得ない場合もあったと考えられます。そうすることにより人々を納得させるという作用があつたのでしょう。そのようなことから、正体不明の投石の犯人は、天狗や池袋出身の女性とされたのかもしれませんが。（藤岡）

“ここまでわかったーねこあんかー”

各地の博物館や資料館には、さまざまな資料が収蔵されています。なかでも、わたくしたちが使ってきた生活用品のうち暖房具として分類されるものは、その地域の気候風土による違いや時代による変化等により、実に多様なものがあるようです。火鉢・炬燵・湯たんぽ・懐炉といった暖房具はよく知られており、現在でも多くの人が使っています。ここでは、ある年代の方にとっては馴染みのあるものですが、全く知らない方もいて、この紙面で初めて知るといふ方もいることでしょう。では、その「ねこあんか」を紹介しましょう。

◆「ねこあんかを見せてください」

一〇年ほど前、夏休みの宿題をするために、小学校三年生が続いて来館しました。「ねこあんかを見せてください」といふのです。当時、ねこあんかという暖房具について、知識もなく見たこともなかったわたくしは、館蔵資料の目録から探し、そして収蔵庫から持参して見せました。小学生は、教科書に図あるいは写真が掲載されていたためか、形は知って

いましたが、重いことに驚いていました。当館では、資料の寄贈者から使用時期や使用方法、資料にまつわる思い出をお聞きし、記録しています。わたくしは、それをもとに、このとき、初めて小学生と一緒にねこあんかについて勉強しました。

◆誰もが使った？…ねこあんか

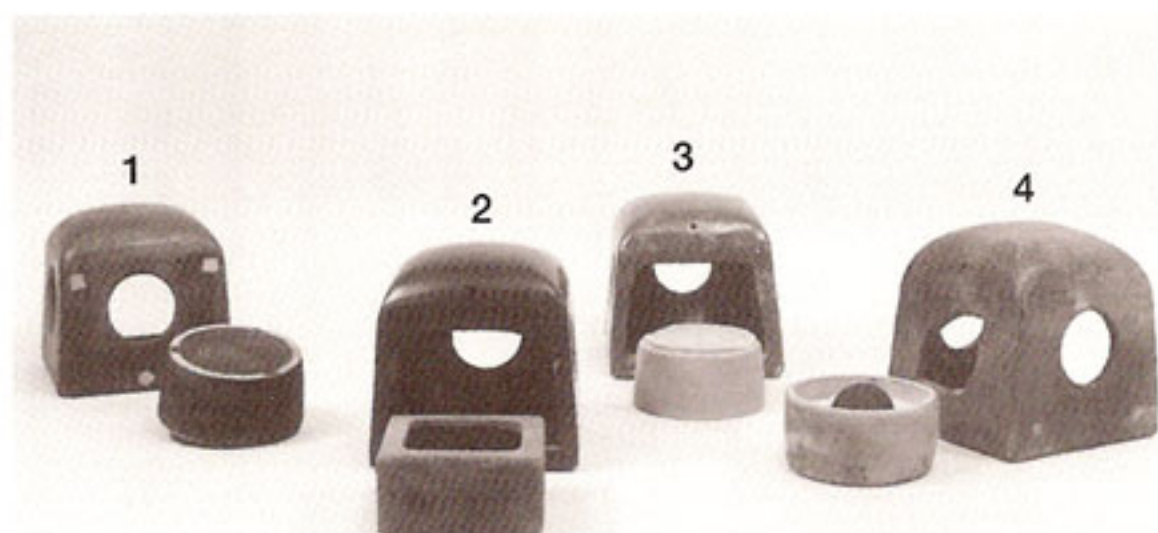


写真1 ねこあんかを、上から下から横から…とさまざまな角度からみてみましょう。

それ以来、どのような理由でねこあんかと呼ぶのだろうか、何を燃料として暖かくしていたのだろうかとか、どこで

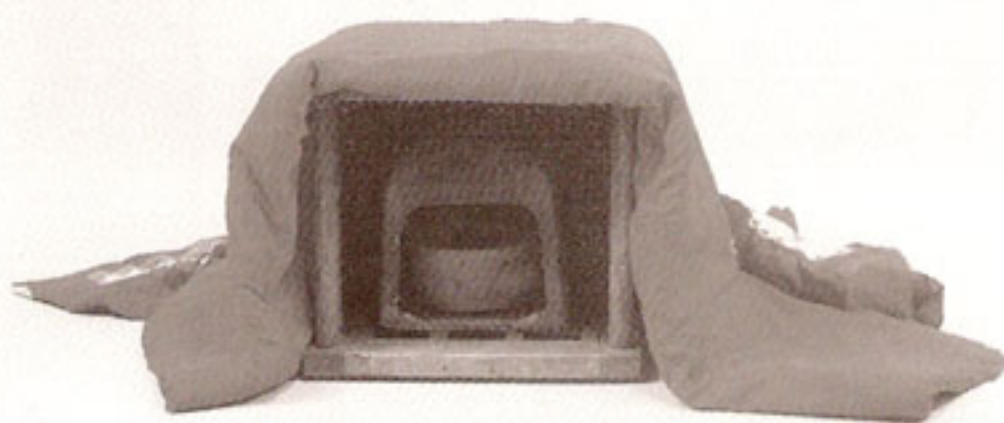


写真2 中央に見えるのがねこあんか。炬燵板は使わない。

売っていたのだろうか。さらに、誰が、どこで作ったのかといったことを、ずっと調べたいと思っていました。

写真1の四点のねこあんかは、館蔵資料です。区民の方が実際に使用していたもので、大きさはほぼ同じです。縦は約二三から二五cm、横は約二四cm、高さも約二四cmです。それが本体で、そのなかには、四角形や円形をした火入れの容器

を入れます。本体は、黒い瓦屋根のように光っています。これは、土で作られています。ただし、No.3のものは素焼きで、青い塗料で色づけしてあります。火入れも土製で、燃料には、No.4のように炭団を使ったり、炭や太い懐炉灰も使っていました。炭団や炭、懐炉灰は、燃すところのような臭いがしたのでしょうか。臭いも、遠い過去のこととなりました。

ねこあんかの使用の一例は、写真2にあるとおりです。一九五六（昭和三一）年に結婚した人の所帯道具のひとつとして揃えたもので、木製の炬燵櫓のなかにねこあんかを入れました。炬燵掛けは、鮮やかな色の綿入れ布団です。



写真3 縦26×横25×高さ25cmで、大きさは写真1のものと同じ。

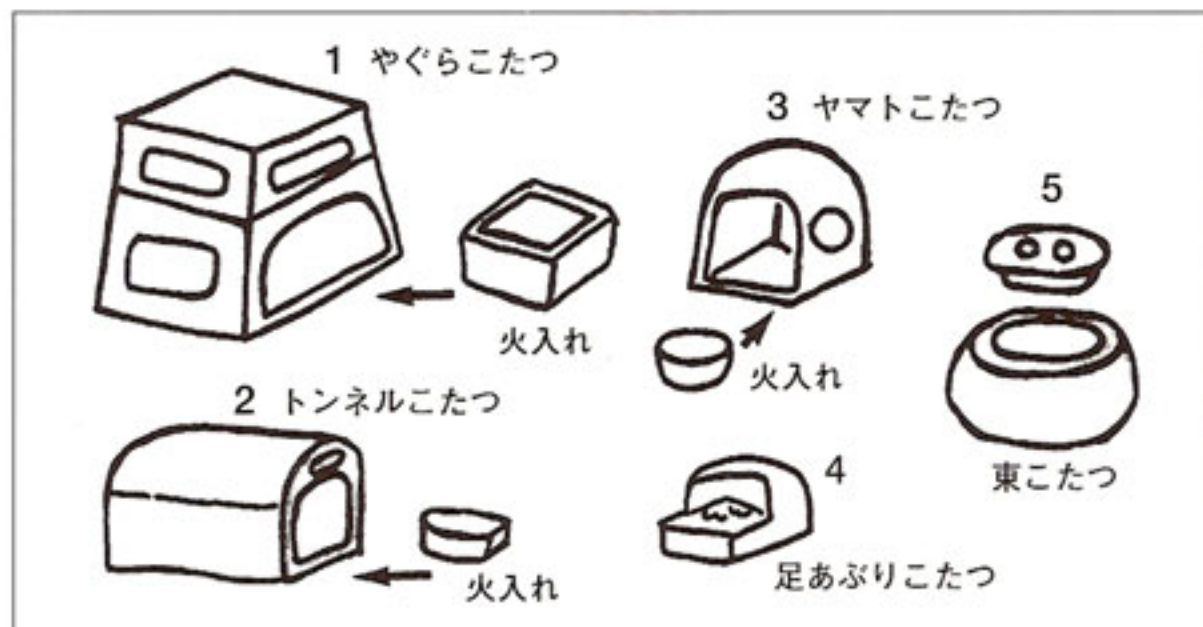
ねこあんかと呼んでいたのは、どうも写真1のものばかりではなかったようです。写真3も、そのように呼ばれていました。火入れは土製ですが、それを入れる本体は職人さんが作ったのか木製で、けんどん式に開閉することができます。

◆どこで作ったの？　なぜねこあんか？

どうやら、ねこあんかは、現在の愛知県碧南市を中心とした地域で作られていたということが、各博物館の「図録」や人づてにわかりました。今では生産されていないようですが、かつては大量に作られ、全国各地で使われていたようです。現在、碧南市に所在する(株)ミカワの方からのご教示によりますと、当地は、江戸時代から土製品の生産地として有名でした。図1や図2のものを戦前から生産し、戦後、碧南地方で生産が発達し、全国に発送したということです。

商品名としてでしょうか。No. 1 はやぐらこたつ、No. 2 はトンネンこたつ、No. 3 はヤマトこたつ、No. 4 は足あぶりこたつ、そしてNo. 5 は東こたつ（あづまこたつ）といっています。No. 5 には蓋が付き、全体が黒磨きされているということです。なかには、容器の側面に絵柄がついているものもあるようです。No. 1・2・3 には、それぞれ火入れの容器があります。この図のなかに、当館が所蔵するねこあんからしきものがあります。それは、No. 3 です。しかし、名称はヤマトこたつとなっています。これを、ねこあんかとはいわなかったようです。

ところで、No. 6 は、一九五一（昭和二六）年頃製造し、新潟県や山形県方面に



出荷していたもので、それをねここたつと称していたようです。そして、燃料には炭や豆炭を用い、灰で覆って使いました。

以上のように、碧南地方では、さまざまな形をしたアンカを製造し、全国各地へ出荷していたことをうかがい知ることができます。No. 1 から 6 までのものは、おそらく、今や使われることがなくなつて、各家の物置や各地の博物館に所蔵されているのではないかと思われます。しかし、それにしても、生産地の碧南地方でねこあんかと呼んでいなかったものが、



豊島区では、なぜそのような呼んだのでしょうか。豊島区以外の地域でのねこあんなの形と呼び名を、こまかく調査してみると、暖房具の呼び名と地域性という視点から、興味深い結果が得られるのではないのでしょうか。

No. 3 は、生産地ではヤ



写真4

図3は、豪雪地帯で使われていたもので、名前をみるとアンカゴタツといっていますが、碧南地方ではやぐらごたつと呼んでいるようです。ここにも、使用地と生産地における呼び名の不一致がみられます。このような不一致は、その地域でのものの使い方多様さや歴史の深さを示していることかもしれません。

それにしても、なぜねこあんなのか、まだ問題は未解決です。
(福岡)

郷土資料館からのお知らせ

入館者の声から

本年七月二七日から九月四日まで、第一会企画展「東京空襲60年」空襲の記憶と記録」を開催いたしました。多くの方々にご来館いただき、アンケートをお寄せいただきました。その中からいくつか、「入館者の声」をご紹介します。

◎感慨ひとしおでした。このような機会に出会えたことを有難いと思いました。

この回だけでなく、機会をお作り下さい。戦争は二度とおこさないように、皆で働きかけたいと思います。(70代・女性)

◎戦争の恐ろしさ悲しさを絵で描いた人のコメントから感じる事ができ、心に響いた。もっとたくさんの人に見てもらえるよう宣伝してほしい。(40代・女性)

◎大変意義のある展示でした。このような展示は、忘れないように定期的に実施してほしいし、やるべき。とても考えさせられた。実施に感謝したい。(40代・男性)

◎皆さんの力強い作品に接し、ひしひしとあの四月一三日の必死で逃げたり、こ

われた家の土ぼこりを吸ったり、その影響でのがガラガラで防火用水の水を飲んだり、その他悲惨な思い出がよみがえりました。よく叫ばれている様に語り継がなければならず、今度の企画は大変有意義と思います。(70代・女性)

◎アメリカ側の資料が興味深かった。

(40代・女性)

◎なかなか当時のことが伝わってくる。

しかし、シュミレーション等、動画があると良いと思った。(20代・男性)

◎「懐かしい」と言っては極めて不謹慎だが、60年前をまざまざと思い出すきっかけになった。TV・ラジオ等で特集番組を視たり聴いたりしたが「展示物」から受ける想起は質が違う。四月一三日は本当にオソロシかった。(70代・男性)

◎戦争について調べていましたが、様々な資料が展示してあり、すぐリアルに感じました。特にB29の模型は下から見ると、昔の人の気持ちがよくわかりました。この展示を見て、戦争のひびきを改めて感じただけでなく、この平和をいつまでも保たなければいけないと思いました。(10代・女性)

■展示・講座についての内容は、当館へ直接お問い合わせ下さい。また、「広報としま」・ホームページをご覧ください。

◇会期中七七通のアンケートをお寄せいただきました。ありがとうございました。全部のコメントをご紹介できないことをお詫びいたします。(いとう)

写真を探しています！

「あら！なつかしい！」・「こんな着物を着ていたのよねえ。下駄履きだわ」・「ア、このお店でよく買物をしたのよ。おまけたもらったわ」・「これは正月だね。まだあそこが空き地で風上げをしてるよ」・「これが家の隣の風景？まだ畑があったのか！」・「道を拡張する前の家の前の通りだ。商店が軒を連ねているよ」・「産湯をつかっている写真だ。古いね。これお母さんなの？」・「出征した隣のおじさんを見送っている写真だよ。まわりの人は近所の人だね」等々。家のアルバムをめぐって下さい。写真はその家の歴史のひとコマですが、また、地域を知るための資料として生かすことができるものです。展示のためにお借りしたく、情報をお寄せ下さい。

編集後記

資料の整理をしていると、その資料を寄贈してくださった方の顔やそのときにかわした話のことが思い出されます。これまで、どれだけの資料を手にし、何人の方に出会ったことでしょうか。資料の寄贈がきっかけとなり、その方と資料館の関わりが始まります。短い期間のこともありますが、振り返ってみると、何年も経っていたということもあります。つい先日、九五歳の男の方が逝去されました。病床では、資料館との楽しい思い出を看護士に話していたということをご遺族からお聞きしました。嬉しいことです。

地域の資料を次世代に伝え継承していくために、今後もひとりでも多くの人にお会いしたいと思います。(ふ)

かたりべ
No.80

2005年12月15日

豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp